白山ふるさと文学賞

第十五回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【島清部門】

中高校生　作文の部　最優秀賞

「描くこと、問い続けること」

松任高校二年　安原（やすはら）　涼音（すずね）

高校二年生の夏がもう少しで過ぎ、進路について考える時間がきっと増えるだろう。周りの友達が「○○大学を目指している」「将来は○○になりたい」と、具体的な目標を口にするようになる中で、私の心には小さな迷いが生まれているのだ。私には、強く惹かれているものが二つある。一つは「イラストを描くこと」、そしてもう一つは「哲学を学ぶこと」だ。

友達にそのことを話すと、時々不思議そうな顔をされるのだった。「まったく違う分野だね」と言われたり、「哲学は仕事につながりにくいのではないか」「絵を描くことで生活するのは難しいのではないか」と、心配されたりすることもある。確かに、一見するとイラストは感性や直感の世界であり、哲学は理論や論理を追求する世界であるため、正反対に見えるのかもしれないだろう。しかし、私の中ではこの二つは深いところでつながっているのだ。

幼い頃から、私は絵を描くことが好きだった。白い紙の上に鉛筆を走らせ、頭の中に浮かんだものを形にしていく時間は、私にとって自然な行為だった。しかし、高校生になってから、ただ「上手に描く」ことだけでは満たされない感覚を覚えるようになった。

同じリンゴを描いても、写実的に美しく表現する人もいれば、あえて形を崩して独自の意味を込める人もいるだろう。同じものを見ているはずなのに、なぜ人によって世界の見え方や表現は変わるのだろう。その疑問を抱いたことが、哲学に興味を持つきっかけになった。

私が描きたいものは、単に綺麗なキャラクターや風景だけではない。言葉にできない感情や、人の心の奥にある小さな違和感、そして「なぜ人は傷つけ合うのか」「生きるとはどういうことなのか」という目に見えない問いを、絵として表現したいのだ。

絵を描くことは、私に見えている世界を形にする作業である。そして哲学は、「なぜ私はそう感じるのか」「本当に大切なものは何なのか」と、物事の本質を言葉で掘り下げていくものだと思う。表現すること と思考すること。その二つは別々なのではなく、世界を深く理解するための両輪なのだ。

私にとって哲学とは、難しい言葉を並べる学問ではない。「当たり前を疑うこと」であり、自分自身の答えを探し続ける姿勢である。例えば、ＳＮＳで多くの「いいね」をもらうことが本当の幸せなのか。周りと同じ道を進むことだけが正しいのか。普段なら見過ごしてしまう小さな疑問と向き合うことこそ、哲学なのだと思う。

もし私がイラストを中心に学ぶ道へ進んだとしても、哲学的な深みを持った表現者になりたいのだ。作品を見た人が「自分も同じようなことを感じたことがある」と気づいたり、自分自身の心と向き合ったりするきっかけになるような作品を生み出したいのだ。

反対に、もし哲学を中心に学ぶ道へ進んだとしても、ただ文章や論文だけで終わるのではなく、イラストや視覚的な表現を通して、より多くの人へ問いを届けられる存在になりたいのだ。どちらの道を選んだとしても、私の土台にある「表現したい」「深く考えたい」という気持ちは変わらない。

もちろん、将来への不安がないわけではない。自分の選んだ道で生きていけるのか、周りから遅れてしまうのではないかと考えることもある。しかし、変化の大きい今の時代に必要なのは、最初から決められた正解を探すことではなく、自分で選んだ道に意味を見つけていくことなのではないかと思う。

迷うこや失敗することも、決して無駄ではないのだ。悩みながら感じたことの一つ一つが、これから描く作品や考え方の深みになっていくはずだ。

大人になるということは、答えのない問いと共に生きていく覚悟を持つことなのかもしれない。私はこれからも鉛筆を握り、考え続けたいのだ。絵に色を重ねるように、一つ一つの問いと丁寧に向き合いながら、自分だけの人生というキャンバスを描いていきたい。

描くことと問い続けること。この二つを大切にしながら、私は自身の歩幅で未来へ進んでいくのだ。

